アイヌ語の『語』の特徴

大島　稔

1. 序

最初に北アメリカのアリュート語を学んだ私は、アリュート語が専ら接尾辞を形態法の手段としている言語なので、アリュート語に遅れて学び始めたアイヌ語の形態法の豊かさに驚き、きっとアイヌ語は言語学の形態論に格好の資料を提供するにちがいないと思ったほどである。しかし、このアイヌ語の形態法の豊かさは、海外の研究者にはあまり知られていないらしい。

海外の言語研究者と話をする機会があると、私が日本から来た言語研究者ということで、アイヌ語やアイヌ文化について質問を受けることが少なからずある。海外においては、日本語や日本文化についての情報はかなり多いので知識もそれなりにあるのだが、同じ日本にあるアイヌ語やアイヌ文化については、その存在は知っているものの、情報が非常に少ないがために興味をそそられるらしい。

ここ十年くらいの間に出版された手元にある形態論に関する文献を見ても、アイヌ語は登場してこない。言語類型論的研究（Comrie 1981, Shopen 1985, Nichols 1986）でも、形態論的研究（Bybee 1985, Hammond and Noonan 1988）でも、抱合言語についての研究（Mithun 1984, Baker 1988）でも、アイヌ語の名前すら出てこないのが現状である。アイヌ語が言及されている文献でも、古アジア諸語の一員として名前が出て来るが、その音韻や形態、統語などに関しての具体的な語例や文例は紹介されていない。どうも外国語で書かれたアイヌ語研究が不足しているためらしい。ほんとうに口惜しい話である。

アイヌ語の「語」の内部構造を観察してみるとなかなか複雑である。

そこには、語を作り出す手段である多様な形態的手法がいくつも複合的に使用されていて、一語を成す要素の数が多いという複統合語的特徴が指摘できる。

語根を中心にその前部要素となる接頭辞と、その後部要素となる接尾辞がある。語根や語基の全体や一部を繰り返す重複があり、自立的な要素である名詞と名詞、動詞と動詞を結合させる合成語もあるし、名詞や副詞を動詞の語内部に含める抱合もある。すなわち、複統合語といってもアリュート語などのように統合の手段を接尾辞法にのみ頼るのではなく、重複法、合成法、抱合、接辞法と多様な手段を用いる点にアイヌ語の「語」の特徴があるといえる。

また、宮岡（1992）にも述べられているように、特に名詞抱合は北東アジアではチュクチ・カムチャッカ語族とアイヌ語にのみ確実に見いだせるという事実がある。この特徴はむしろ北アメリカ・インディアン言語に広範囲に見いだせる特徴であり、接尾辞と接頭辞の併用、名詞には必須の格標示がなく動詞に専ら格関係標示を委ねるなどの主要部標示型の特徴と併せて考えると、アイヌ語は、北東アジアに位置する言語でありながら、形態的類型から見ると北アメリカ・インディアン諸言語と比べるべき特徴が多い言語といえる。

アイヌ語のこのような語構成における多様性を北アメリカ・インディアン諸語を念頭に置きながら類型的に考察するための基礎的な仕事として、アイヌ語の「語」の特徴を知里（1974）、田村（1972，1988）、切替（1989）などの先行研究に依拠しながら筆者なりに整理し、いくつかの未解決と思われる問題を指摘してみたい。

2．語構成要素は接頭的か接尾的か？

アイヌ語は、主要部標示型の言語であるから、その語構成は、文の主要部である動詞において最も複雑である。したがって語構成の多様な姿を見るためには、動詞について観察するのがよい。

アイヌ語の動詞は、人称要素が付加しうる動詞語基を出発点としてその前後に他の要素を接頭したり、接尾したりして語を構成して行く。他の要素とは、合成法や抱合のように自立要素（以下では、自立要素の境

界を＝の記号で示す）である他の語基であったり、非自立要素（非自立要素の境界をハイフォン-で示す）の接辞であったりする。

語基は、それ自身のみで動詞として機能するものであるが、語根は、語基形成接尾辞と結合して初めて動詞として機能するものである。

動詞語基の形成をもう少し詳しく見ると、イ）重複法、ロ）接辞法（語基形成接尾辞、語類変換接尾辞）、ハ）合成法の三種の手法が関与していることがわかる。

2－1　重複法

語基形成に重複法（以下では、重複要素の境界を≠で示す）を用いると語根にイ）動作の反復性、ロ）動作の漸進性、ハ）動作の結果の継続性の意味が加えられる。

アイヌ語にはＣＶＣ語根（Ｃ：子音、Ｖ：母音）と言われるものがあり、この類の語根は、語基形成接尾辞が付加されて初めて動詞語基として機能するが（例1,3）、しばしばＣＶＣの全体または一部が重複されて新たな語根を形成したあと語基形成接尾辞で語基となる（例2,4）。

重複法により、また語基全体（例5,6）が重複されたり、さらに重複形語基がさらに重複されたりすることもある（例7）。語根＋語基形成接尾辞から成る語基の場合は、例2と同様にその語根部分（例11）ばかりではなく、語基全体（例8,9）あるいは一部（例10）が重複されて新たな語基が形成されることも可能である。

重複法は、全体重複の場合には接頭的か接尾的か判断し難いが、一部重複において明らかなように（例4,10）、接尾的と見ることが妥当である。

重複法が語形成に関与できる範囲は、一般に無制限ではなく、ある種の制限が働くことが知られている。アイヌ語においては語根と語基が圧倒的に多いが、例12のように、接頭辞で派生された語、あるいは、例13のように名詞抱合の語も重複の対象となっている例も見いだされる。アイヌ語の重複法が適用される範囲は、今後さらに追究されるべき課題であろう。

2－2　合成法

自立要素の語基と語基が結合して新たな語基を作り出す合成動詞では、

例16のように後項が助動詞である場合を除くと、例14に見られるように前項が後項に対して副詞的に働き、例15のように前項と後項で名詞項をとる数が異なる場合には、取り得る名詞項の数が後項に一致するので、合成動詞を接頭的タイプの要素付加と見ることができる。この事は、合成名詞においても成り立つようである（例17,18)。

以上のようにして形成された語基にさらに接辞と抱合要素が付加されて語が構成される。その具体的な姿は、次章で見ることとし、接辞法と名詞抱合について接頭タイプか接尾タイプであるかを見てみる。

2－3　接辞法

接辞は非自立要素であり、自立要素の語基に結合し後述するように様々な機能を発揮する。表１で見るように、北アメリカの接頭タイプの言語と比べてみると（たとえばトリンギット語では、９種で30以上もの接頭辞がある)、アイヌ語では接頭辞の数は少ないのが特徴的である。もっとも所属接頭辞は、北アメリカ北西部のインディアン語に見られる具体的な名詞概念を表わす語彙的接辞（接尾辞が多い）に似ている。もちろん接頭辞は接頭タイプで、接尾辞は接尾タイプである。人称を標示する要素は、他の接辞と比べると自立性が高く、それ故に人称接語と呼ばれるが、ここでは他の接辞とともに表１の接辞リストに含めて掲げてある。

2－4　名詞抱合

名詞抱合には言語によっては動詞語基の前に抱合されるタイプと後に抱合されるタイプがあるが、アイヌ語は、語基の前に抱合されるタイプで語基の後ろに抱合要素が現れることはない(例19)。従って接頭タイプである。

3.　語構成要素と動詞（結合）価の変更

アイヌ語の語構成要素の中で、接頭語であれ接尾語であれ、接語は、人称を標示する機能を有する、語に義務的な要素と考えられる。接語の内側の要素は、動詞が持っている結合価(文の中で取り得る名詞項の数)を変更する機能を持つものと項関係を変更しない修飾的な機能を持つも

のに分けられる。表２は、動詞が取り得る名詞項を増やすものをプラス１、減らすものをマイナス１、項関係を変更しないものを０と表したものである。

なお、人称標示と動詞の結合価の関係については、つぎのような規則が働いていると考えられる。

(イ)動詞の結合価は、動詞内部の構成要素で埋めることができる。

(ロ)人称は、動詞内部で人称の内側にある要素で埋められていない結合価のうち１、２人称を優先的に二項まで埋める。

(ハ)残った結合価は動詞の外の名詞項で埋められる。

つぎに表３の具体例を参照しながら、接辞の結合価が変更される過程を見ることにしよう。

再帰接頭辞は、例20のように二項動詞 hoyuppare「～を走らせる」の動作主「若者達」が再帰して、目的語の項を埋め、全体として動詞がその外にとる名詞項を減らす働きをしている。

補充接頭辞は、例21のように二項動詞 okere「～を終わりにする」に目的語となる非動作主の名詞項を一つ加える働きがある。この例では、１人称接語＝i が新しく付加された項を埋めている。

所属接頭辞は、例22のように常に動詞の外にある名詞項を所有者とする所属関係にあるため、全体として項関係に変更がない。所有者は、動詞に対して例22のように自動詞主語 e-san「主語（岬）の頭が下がる」であることも、他動詞主語 e-ciw「主語の頭が～に突き刺さる」であることも、他動詞目的語 e-kupa「目的語の頭～を噛む＞～を口にくわえる」であることもある。

名詞抱合には、例23のように二項動詞 ke「～を削る」の目的語に相当する名詞（inaw）を動詞内部に取り込み全体として一項減らす働きがある。抱合される要素は、他動詞の目的語ばかりではなく、自動詞主語(sir＝sesek 「暑い」)、合成名詞（[sir＝kut]＝tunas「あの世から人がくる」)、名詞句（[wen＝［kew＝tum]]＝kor「悪心を持つ」）なども可能であり、さらに例24のように所属句の一部（tom-o は to ka を所有者として所属句を成す。この場合、名詞項の増減は、所属接頭辞と同様に０となる)、例25のように２つの名詞項（二項動詞 kus に対して sietoko が目的語、urar が主語に相当する）を抱合する可能性もある。名詞抱合は、アイヌ

語の表現力を豊かなものにしている語構成要素であるから、どの程度までの要素が抱合可能なのかは今後の重要な研究課題と言える。

他動化接尾辞と使役化接尾辞は、例26,27のようにともに動作主の項を一つ加える働きを持つ。例26では、一項動詞 sat が 他動化接尾辞-ke によって二項動詞となり、動作主の「私」が加わっている。例27では、二項動詞 kor が使役化接尾辞-e（{-re} の異形態）によって三項動詞となり、動作主「私」が加わっている。

4. 結　語

アイヌ語の「語」を構成する様々な要素を分類し（表１参照）、それらが中心核要素と結合する際の相対的な順序について概観しながら、接頭辞、合成、抱合に見られるように接頭タイプの要素が意外に多いという事実を見てきた。

また、動詞の結合価に触れて、動詞内部の接頭要素と接尾要素が動詞の外に取り得る名詞項の数を変更していく過程も見てきた。すなわち、この動詞内部の項の増減によって最終的にその動詞が取る名詞の数が決って来るのである。重複法、合成法、接辞法、名詞抱合と形態法が多様であるアイヌ語においては、一語の中にいくつもの要素が配置され、それらの要素間の結合は、時には例28に見られるような比喩的でかなり抽象的な表現を生み出す原動力となっている。

アイヌ語のこの多様な形態法の組合せは、形態論研究に貴重な資料を提供するであろう。特に抱合現象については、まだ未解明な部分が多く、北東アジアに位置する言語の中で抱合現象を有する言語が少ない点を考慮すると、言語類型論においてアイヌ語の抱合についての研究が寄与するところは大きいといえる。

表１．接辞リスト

接頭語

１）人称Ⅰ: ku=, ci=, a=, e=, eci=, 0=

２）人称Ⅱ: en=, un=, i=, e=, eci=, 0=

接頭辞

3）再帰接頭辞:VV he-, ho-; yay-, si-, u-

4）補充接頭辞:VV e-「～でもって」, o-「～において」, ko-「～に向かって」

5）所属接頭辞:VV e-, o-

6）不定化接頭辞 ci-, i-

接尾辞

7）語基形成接尾辞:RV1 -ke, -se など, RV2 -V/-pa

8）語類変換接尾辞:NV1 -nu, -(i)n (sg.), -(i)p (pl.)など

9）他動化接尾辞:VVn+1 -V/-pa, -ke, -ka, -te

10）複数接尾辞:VV -pa

11）使役接尾辞:VVn+1 -re/-e/-te, VV -yar/-ar

接尾語

12）人称III:=an (=as)

表2．語構成要素の動詞結合価

再帰接頭辞（動詞主の再帰、非動作主の項を減らす）：－1

補充接頭辞：（非動作主）＋1

所属接頭辞：±0

名詞抱合要素：－1

（所属句の一部抱合ならば、±0）

他動化接尾辞：（動作主）＋1

複数接尾辞：±0

使役接尾辞：（動作主）＋1

表3．例文

(1) ter-ke　擬態語根-自動詞語基形成接尾辞　「跳ねる」(切替　1989)

(2) [ter≠ter] -ke　[tet≠ter] -ke　擬態≠重複-自動詞語基形成接尾辞　「ピョンピョン跳ねる」(田村 1972)

(3) car-se　擬態語根-自動詞語基形成接尾辞　「(上からサッと)すべる」

(4) [car≠ar]-se　擬態語根≠重複-自動詞語基形成接尾辞　「(山を)すべり下りる」(服部 1964)

(5) ta　「～を断つ」

(6) ta≠ta　語基≠重複　「幾度も断つ」

(7) tata≠tata　語基≠重複　「トントンたたいて細かくする」(田村 1972)

(8) he-pok-i　自分の頭-下-他動詞語基形成接尾辞　「頭を下げる」(田村　同上)

(9) he-［pok-i≠pok-i］　自分の頭-［下-他動詞語基形成接尾辞≠重複］　「何度も頭を下げる」(田村　同上)

(10) he-［poki≠ki］　自分の頭-［下-他動詞語基形成接尾辞≠重複］「頭を下げている」(田村　同上)

(11) he-［pok≠pok］-i　自分の頭-［下≠重複］-他動詞語基形成接尾辞　「何度も頭を下げる」(田村　同上)

(12) o-rep ≠o-rep　補充接頭辞-自動詞語基≠重複　「～をたたいて拍子をとる」(田村　同上)

(13) hom＝us ≠hom＝us　名詞「節」=他動詞語基≠重複　「こぶだらけだ」(田村　同上)

(14) nokan＝mes-ke　細い=擬態語根-自動詞語基形成接尾辞「ちぎれる」＞細くちぎれる (渡辺他 1991)

(15) wen＝resu　悪い=育てる ＞ 引き取って育てる　(田村　同上)

(16) ipe＝rusuy　食べる=欲しい ＞ 食べたい　(田村　同上)

(17) ohaw＝su　おつゆ=鍋 ＞ おつゆを煮る鍋　(田村　同上)

(18) nokan＝kam　細い=肉 ＞ 細くちぎれた肉　(田村　同上)

(19) inaw＝ke　イナウ=他動詞「～を削る」＞ イナウ削りをする (渡辺他 1991)

(20) ［okkay-po utar］　［e-kim-ne］　u-hoyup-pa-re
男-若い　達　向かって-山-の方へ 互い-走る-複数-使役 ＞ 若者達が山の方へ走り合う (渡辺他　同上)

(21) ［haru］　a＝i＝ko-okere　食べ物　不定-私-～の所で-～を終わりにする ＞ 私の食べ物もなくなる　(渡辺他　同上)

(22) e-san not　～の頭-浜へ下る　岬 ＞ 海に突き出た岬 (切替 1989)

(23) inaw＝ke＝an　イナウ-～を削る-私 ＞ 私はイナウを削る　(渡辺他 1991)

(24) ［cironnup］［to ka］　tom-o＝tuye　湖も　まん中-所属形=～を切る ＞ (キツネ) が湖を横切る　(渡辺他　同上)

(25) ［esaman］　a＝e-［si-etok-o＝］［urar＝］kus-te　カワウソ　私-～のために-自分の-前-所属-霧-～を通る-使役 ＞ カワウソのために自分の前に霧を覆う　(渡辺他　同上)

(26) ［cep poronno］　a＝sat-ke　魚　たくさん　私-乾く-他動化 ＞ 私は魚をたくさん干す　(渡辺他　同上)

(27) ［a＝kotan-u utar］［cep ar-ke ka］　a＝kor-e　私の村の　人々に　魚の　片半身でも　私-～を持つ-使役化 ＞ 私が魚片半身でも村人に持たせる　(渡辺他　同上)

(28) ［usa oruspe］　a＝e-yay-ko-tuyma＝si-ram＝suypa

色々な　事　私-〜について-自分-から-遠く振り返って（自動詞）-自分の-心-〜を揺らす（複数）　＞　「色々な事について吾みづから遠くとつおいつ思ひめぐらす」（知里 1974）

文　献

知里真志保・金田一京助　1974：「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』第4巻（平凡社）

服部四郎編　1964：『アイヌ語方言辞典』（岩波書店）

切替英雄　1989：「『アイヌ神謡集』辞典」『北大言語学研究報告』第2号（北海道大学文学部言語学研究室）

宮岡伯人　1992：「環北太平洋の言語」宮岡伯人編著『北の言語　類型と歴史』（三省堂）

田村すず子　1972：「アイヌ語沙流方言の動詞に見られる重複法」『アジア・アフリカ文法研究』1（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

——　1988：「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著　『言語学大辞典』第1巻（三省堂）

渡辺　仁・大島稔・切替英雄・佐藤知己　1991：『アイヌ民俗文化財調査報告書：アイヌ民俗調査X（千歳地方）』（北海道教育委員会）

Baker, Mark C. 1988 : Incorporation, The University of Chicago Press, Chicago/London

Bybee, Joan L. 1985 : Morphology, Typological Studies in Language Vol. 9, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia

Comrie, Bernard 1981 : Language Universals and Linguistic Typology, Basil Blackwell/Oxford

Hammond, Michael and Noonan, Michael 1988 : Theoretical Morphology, Academic Press, Inc. San Diego/New York/Berkeley/Boston/London/Sydney/Tokyo/Toronto

Mithun, Marianne 1984 : "The Evolution of Noun Incorporation", Language 60(4)

Nichols, Johanna 1986 : "Head-Marking and dependent-marking Grammar", Language 62(1)

Shopen, Timothy 1985 : Language Typology and Syntactic Description, 3 Vols., Cambridge University Press, Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney